

私が『フルベッキ伝』で伝えなかったこと

井上 篤夫 (作家)

二〇一六年六月、私は『フルベッキ伝』執筆にあたってフルベッキの故国オランダを訪ねた。小雨模様の中をオランダ・アムステルダムから列車で北へ三〇分、ユトレヒト駅で降りた。そこからバスに乗り換えて三〇分もすると、景色は一変した。雨上がりの緑豊かな落ち着いたヨーロッパの街並みが、私の眼前に広がった。ザイスト (ツァイスト) はフルベッキ、一八三〇年、ギドー・ヘルマン・フリドリッヒ・フェルビーク Guido Hermann Fridolin Verbeck) が生まれ育った町である。この教会の資料室で私は幸運にも、悩める青年フルベッキの書簡を発見した。この書簡は

モラヴィア教会の史料室に保管されていた大量の写真と史料の中にあつた二通の書簡のうちの一つである (もう一通は母の死を親類に伝えたもの)。

この手紙は古いドイツ語の文体で書かれていることから、おじさんに「特別」の思いを込めて認めたことが伺える。この文書を所蔵していた遺族が教会に寄贈したという。誰の目にも触れずに今日まで眠っていたことになる。その一部を紹介する。

ヴェルター叔父さま

親愛なる叔父さま、音楽と歌唱は私の喜び、また命です。さて、音楽はひとつの専門領域としてはとても広いのですが、私はピアノとオルガン演奏、合唱と独唱から始めたいと願っています。上

目次 兼 研究発表リスト (その47) 前号と一部重複

第442回 2023年4月15日

私が「フルベッキ伝」で伝えなかったこと 井上 篤夫 1

第443回 2023年5月20日

日本人の内面と国家主義の残存 C.D.ホルトムの視点から 原 真由美 前号掲載

第444回 2023年6月17日

象徴天皇 「象徴」像の変遷と戦争責任 吉 馴 明 子 3

第445回 2023年7月15日

湯浅八郎の留学経験 辻 直 人 5

第446回 2023年9月23日

米国福音教会女性宣教師 G.E. キュックリヒのキリスト教幼児教育
一フレーベル思想と幼児教育のかかわりの中で一 菅 原 陽 子 7

横浜海岸教会150年史編纂に関わって (2) 岡 部 一 興 10

川島第二郎氏を偲ぶ 花 島 光 男 13

編集後記 14

階の宿泊用の小部屋にピアノを置けば、人を邪魔したり人から邪魔されたりすることなく、早朝から深夜まで練習できます。オルガンはザイスト市にはたくさんあり、両方のレッスンを受けることが可能でありましょう。——歌唱については、私はすでにザイスト市の男声合唱団に所属しています。冬前には、ザイスト市のもっと大きな合唱団に、さらにユトレヒト市の男声合唱団に入ることができるでしょう。聞き歌いをするにも利点があります。若干の例外はありますが、さしあたりピアノ音楽は十分足りています。ピアノのレンタル料、さらにもしかするとピアノ音楽とオルガン、その両方のレッスン代、英語とフランス語のために週に数時間、さらにもしかすると予想外の出費を加えて、必要な費用は一三〇～四〇〔*単位不明〕と計算できるでしょう。つまり八ヵ月分です。

ギドー

音楽志望だった青年は二二歳の時にアメリカに渡った。アメリカ各地で工業技師などを務めたが、うまくいかなかった。コレラに罹り「生死を彷徨った」。その後、二九歳、オーバン神学校を優秀な成績で卒業する。按手礼を受け、ブラウン、シモンズらと宣教のため来日、長崎に赴任する。しかし、禁教下、布教は思うように進まなかった。一方で長崎の済美館、致遠館などで英語などを学生に教える。三九歳、開成学校設立にあたり上京。大学南校（現在の東京大学）の教頭となる。岩倉使節団の「草案」ブリーフ・スケッチを書いて、使節団の骨格を形成した。その後、大学の教頭を解任後、政府の法律顧問や聖書の翻訳（特に詩篇）などに従事。無国籍だったが、晩年は日本永住権を得て地方伝道に専念する。在日四十年、日本の地に没した。妻マリアと共に青山墓地に眠っている。教え子たちの寄付で記念碑が建立された。ギドー・フリドリッヒ・フルベッキ（一八三〇～一八九八）と刻まれている。

在日四〇年、フルベッキは日本の若者たちに何を伝えたかったのか。

一八八六年九月一日、本郷青年奨励会 東京本郷・本郷一致教会会堂で、フルベッキは「基督教ハ社会進歩の爲めに必要なり」と題して語って

いる。

「第一 凡そ社会の進歩ハ一個人の一進歩に由るもので御座ります。なぜならば社会といふものハ一個人から成り立つもので御座ります故に人間社会の中に含まれたる一個人たるものが皆な銘々に能く進歩するならば其の全体の社会が必ず善く進歩していく筈で御座ります。一個人たるものが皆油断をして滞るならば即ち簡様な人間を含む所の社会ハ必ず進歩せいで止まって居る訳で御座りませう」

一人ひとりが進歩しなければ、社会は進歩しない。

フルベッキは生徒たちに事あるごとに言った。「野蛮な国になってはいけない。サムライたちは自藩の存在は理解したが、日本国全体のことは分かっていなかった」

自らの頭で考え、藩などにとらわれない自由な個人の発想を説いた。

フルベッキは宣教師の枠に囚われず、真に生きるとは何かを日本の人々に伝えた。その行動は世代を超えて後世に受け継がれている。

「フルベッキ先生」と多くの当時の人々が尊敬した。時に周囲の人々から理解されないこともあった。大学南校時代、高給を得ていたため宣教師仲間やその家族から嫉妬の対象にもなった。「日本官庁の顔色を窺い、ご機嫌取りに汲々とする以外に取柄はなかった」と陰口をたたく者もいた。

晩年、フルベッキは聖書翻訳や地方伝道に全力を傾けた。

日本語を流暢に話すフルベッキの人気は高く、キリスト教信者の数が増えたとも報じている。

それまで、神経衰弱に陥ったことはあったが、「病気で一週間と寝込んだことはなかった」（『日本のフルベッキ』）が、前立腺肥大が彼の肉体を苦しめた。

伝道で二十二日間、寝食を共にした田村直臣（植村正久、内村鑑三、松村介石とキリスト教会の四村と呼ばれるが自伝『信仰五十年史』でフルベッキの素顔を記している。

「他の外国人にありがちなケチ臭いところはなく金離れのいいお方で、車夫に心づけをやるにも、また宿屋に茶代を置くにも、旅行中、嫌な感じを

与えなかった」

一八九七年（明治三十）、春には名古屋、信州小諸、秋には青森に伝道に出かけたが、体調を崩し、医師から地方伝道を禁止される。翌一八九八年（明治三十一）になると、心臓と腎臓が急速に衰弱していた。それでも、三月三日には、伊豆への伝道旅行の打ち合わせをジェームズ・バラ（横浜バンドの創始者）とするため横浜に出かけ、三月六日、東京・赤坂の自宅近くを娘のエマと散歩した。

そして三月十日、自宅でいつものように軽い昼食とティフィン（紅茶のリキュール）を摂ろうとした時、突然襲った心臓麻痺で死去した。享年六十八。

父を看取ったエマが伝道局のコップ宛ての書簡（一八九八年四月十四日付）で父について記している。

「（父は）卑しい精神、営利の精神、金銭欲を嫌っていました。父は最も無欲の人間でしたから、いろんな方から父の慈悲心に訴えられた要求に“ノー”と言えなかったのです」

日本の新しい時代を建設する逸材を育てた教育者でもあった。

ブロンドの髪には白いものが混じっていたが、目を見開いて話す姿は終生変わらなかった。

フルベッキはロングフェローの詩の如く生きた。「更に高き或るものに達せよ」

フルベッキの死には多くの追悼の言葉が寄せられた。シェーラーは追悼文（Evangelist一八九八年六月号掲載）を寄せている。

「フルベッキが日本にいなかったなら、今の日本にはなっていなかっただろう。日本という国が、本来の姿からより神の国へと近づいたのは、彼のおかげである」

井上篤夫著『フルベッキ伝』（国書刊行会 二〇二二年刊行）

本稿は本書刊行にあたって、横浜プロテスタント史研究会の求めに応じて行なった講演（二〇二三年四月一五日、指路教会）を再構成したものである。

『フルベッキ伝』は令和5年度 日本英学史学会 豊田賞を受賞しました。

象徴天皇

「象徴」像の変遷と戦争責任

吉駒 明子

「天皇」が私の記憶に最初に登場するのは、幼稚園時代のこと：園児たちは国鉄（JR）の踏み切りの前に並び、「ほら、汽車が来ますからね」「旗振って！」といわれ、汽車はあっという間に通りすぎて行った。そもそも天皇制とは民主主義の日本でどういう存在なのかと考え始めるはるか前に、「天皇」は私の意識の中に植え付けられたと言ってよいだろう。やがて高校、大学に進むと私たちは「天皇制」とは何か、特に日中・太平洋戦争の戦争指導者としての「天皇」について考えるようになり、丸山眞男の「超国家主義の論理と心理」に目を奪われた。そのような戦時下の天皇は現在の象徴天皇とはもちろん同じではないが、果たしてどのように変わってきたのかを今一度考えたいと思う。

1. 15年戦争下での裕仁天皇

まず戦時中の裕仁天皇について考えよう。

① 宮城前広場で、親閲式（学生や、在郷軍人が分列行進などを行った）、観兵式に現れる天皇

例えば、紀元二六〇〇年の式典では、天皇の臨席の下宮城前広場で整然と行進・分列行進が披露され、天皇を中心とする国民の一体感が醸し出された。武漢三鎮占領（1938.10）や、シンガポール陥落（1942.2）時にも、天皇は二重橋に白馬に乗って現れ、集まった臣民は「天皇陛下万歳」を叫んだ。

他方、天皇が東京帝国大学へ行幸し“高等官”に拝謁を給う式では、壇上で挙手の礼の姿勢を取って頭を右から左へと回して、教授及び事務官の拝礼に応えたという。悠揚迫らぬ堂々たる姿であったと、丸山眞男が回想している。騎乗の姿のみならず、普通の立ち姿も「ピンと背筋を伸ばした」姿であった。

② 統帥権掌握者として

1941年12月8日、日米戦争が始まる。日本が優位に立っていたのは真珠湾攻撃からしばらくの間だけで、半年後（1942年6月～）のミッドウェー海戦からアメリカが攻勢に転じた。東京が初めて

空襲を受けたのがこの1942年4月であった。日本軍が進出したエリアを念頭に置いて戦争推移を追って見よう。

1943年9月、日本軍がニューギニア・スタンレー山脈の攻防に敗れると、天皇は勝利の見込みを失ったとされる。それでもすぐに戦争を止めるとは言わず、「一撃（後）講和」を主張し続けた。1944年夏以後、南太平洋諸島の日本軍は陥落する。10月にフィリピン・レイテの軍事拠点を失った日本軍はルソンでの挽回を企図し、軍医だった私の父もルソン島へ12月に上陸した。（父はほとんど戦わずして総退却、武器も食物もなく、45年7月半ば死亡、餓死だったという。）44年10月25日、特攻隊の初出撃があり、11月24日、東京がB29による空襲を経験した。ちなみに東京大空襲は翌1945年3月10日である。その一月前の2月には、天皇は重臣たちに一人ずつ戦争の見通しを聞いた。その中で、終戦の提言を行ったのは近衛一人（実際は吉田茂の文章）だったが、それはあまりに悲観的と取り上げられなかった。

1945年5月26日、東京空襲で天皇の住んでいた明治宮殿が類焼を受け、皇太后が住んでいた赤坂の大宮御所が焼け落ちた。その三週間後の6月14日、裕仁天皇夫妻は大宮御所へお見舞いに行き戦況を説明し、皇太后に軽井沢への疎開を勧めた。しかし、皇太后はそれを拒否し赤坂にある防空壕で住み続けると答えた。ほぼ1週間後の6月20日、天皇は東郷外相に戦争の「早期終結」を指示し、7月7日にはソ連へ「和平仲介」を依頼した。それでもまだ「和平一本」ではなく、12日の駐ソ大使宛ての電報には、「祖国の名誉と生存の為、一切を挙げて戦い抜く」という文章が見られる。レイテでアメリカに一撃を加える夢も叶わず、沖縄戦も惨憺たる結果に終わっても、無条件降伏を求めるポツダム宣言に対し、6月27日「ただ黙殺するのみ」と首相が表明した。7月30日、天皇は宇佐（大分）・香椎宮（福岡）へ勅使を送り「敵国撃破」を祈願させた。8月6日、9日に原爆が投下され、ソ連が参戦、ようやく10日御前会議で「国体護持」を条件に「ポツダム宣言受諾」を決定した。そして、日米双方の情報通の活躍によって、天皇制の廃止という最悪の事態が現実化すること

なく、日本は連合国に降伏し戦争を終えた。

2. 敗戦後の「背広」の天皇

① 天皇のマッカーサー訪問

1945年8月30日、マッカーサーが厚木飛行場に降り立ち、アメリカによる日本に対する占領統治が始まった。9月27日、裕仁天皇はマッカーサーを訪問。大柄な軍服姿のマッカーサーと、緊張感をみなぎらせて立つ小柄な天皇の写真は、この時のものである。国の軍事力のみならず、自身の統治権も否定され、完全に従属的な立場に置かれながら、なお日本の「統治」責任者として「背筋をピンとして」立っている。この面会時に、裕仁天皇は全国行幸の希望を述べ、マッカーサーはこれを「民主的でよい」と快諾した。

② 「新日本建設に関する詔書」-人間宣言(46.1.1)

翌46年元旦に出された「新日本建設に関する詔書」は、天皇の「人間宣言」と呼ばれてきた。いや、そんな上等なものではなく、「五箇条の誓文」を以て日本の“民主的”伝統を誇示するだけの文書だと近年はいわれる。確かに、自分は“人間”だと書いてあるわけではない。

「朕と爾等国民との間の紐帯は、終始相互の信頼と敬愛とに依りて結ばれ、単なる神話と伝説とに…非ず。天皇を以て現御神とし、且つ日本国民を以て他の民族に優越せる民族…世界を支配…架空なる観念に基くものにも非ず」

それでも、“現御神”を否定し、“他の民族に優越せる民族”を否定した文言が、“公”にされた事実を無視してはなるまい。ただし、この“人間宣言”の第一次案には、天皇は“神の裔に非ず”という表現があり、裕仁天皇が違和感を示したといわれる。天皇にとって「万世一系」の天皇、「皇統連綿」がどれほど重要であったかが推測される。

③ 全国行幸←騎乗の軍人指揮官を払拭

天皇による行幸は、1946年2月、神奈川県、東京都で始まった。最初の神奈川県では、昭和電工の工場、戦災者用バラック、横須賀引き揚げ援護局などを訪問した。帽子をチョットあげて国民に応える平服姿の天皇を国民は歓迎し、軍服ではなく平服姿の天皇が定着していく。（3月群馬、埼

玉県、6月千葉、静岡県から始まり、10月愛知、岐阜県、11月茨城県。1947年5月の憲法発布後、全国行幸を再開。以後1948年東京裁判のための行幸を休止を挟み、49年九州、四国、近畿。52年の講和条約調印を経て、54年北海道で終えた。）

3. 象徴天皇：「日本国憲法」で正式に決定

1946年3月6日「憲法改正草案要綱」が発表され、枢密院で字句上の修正を経て、帝国議会議に提出された。その第一条が「天皇は日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴である」。

この草案を見て、天皇も高松宮も「国民主権」が強すぎると感じたというが、5月31日天皇はマッカーサーに新憲法作成の助力に謝意を表した。天皇制が維持されたことで良しとしたのだろうか。6月20日～10月7日、国会での「百日審議」を経て、1946年11月公布。1947年5月3日、日本国憲法が施行された。

まず「象徴」について；貴族院での審議に参加した南原繁は、「象徴」は法律的には「実体概念」でなく、何の「機能」も表していない。ただ「儀礼的、修飾的な天皇」にすぎません。「統治せず」はもちろん、「君臨」もせず、と述べた。

また「天皇の地位は、主権の存する国民の総意に基づく」は、大日本帝国憲法下の「神聖」なる天皇との相違を浮かび上がらせた。戦前の天皇は「統治権の正統性の根拠は…所謂神勅にある」のに対し、新憲法下の天皇の権威は「国民に由来」する。「君主主権から国民（人民）主権に変化」した。

私たち60年代の学生は、南原が述べたように、天皇を「儀礼的」で形式的なものと考えてきた。新年に行われる一般「参賀」は、天皇の「儀礼的」存在の最たるものだろう。それ以外の天皇の務めは「内閣の助言と承認の下「国事行為」を行う」こと、国会開会の挨拶、法令制定時の副書といった単純な作業と私たちは教えられてきた。ところが代替わりの「おことば」をきいて、宮内庁HPを見ると、明仁天皇の「行幸啓」などがあまりにも多いのに驚いた。学生時代に学んだ天皇の務めとは比べものにならない忙しさである。この変化は、「日本国の象徴」の天皇から、まさしく「日本国

統合の象徴」への変化を示している。大衆民主主義の時代にあって、天皇は国民「統合」の機能を持たされ、君主制へと変質する可能性もあろう。主権者である国民の能力が問われている。

湯浅八郎の留学経験

辻 直人（和光大学）

本研究は、報告者が10年にわたり追いかけて来た海外留学に関する史料調査によって発見された新史料に基づきまとめられたものである。報告者は2011年よりアメリカ各地の大学で調査をする中で、イリノイ大学史料室で湯浅八郎に関する史料を見つけた。2015年8月のことである。その内容は、彼がイリノイ大学留学時代に経験したことを記録したものだ。これまで報告者は日本キリスト教教育史研究として、日本のキリスト教学校の歴史についても調べてきた。湯浅は同志社総長を2度務め、更に国際基督教大学の初代学長も務めた人物であり、報告者の関心である留学史とキリスト教教育史の両方に関わる人物として、その経歴や思想に興味を覚えた。こうして湯浅八郎のことを調べ続け、2023年2月に『湯浅八郎の留学経験 アメリカにおけるキリスト教国際主義との出会いとその影響』（教文館）として研究をまとめ、刊行することができた。

湯浅八郎は1890年4月に榎坂幼稚園としても用いられていた赤坂の自宅で生まれた。父治郎は新島襄から洗礼を受けた安中の商家有田屋の当主でもあり、母初子は熊本バンドに連なる徳富家の四女で、八郎は熱心な信仰の家庭で育った。1908年3月に同志社普通学校を卒業し（その頃同志社教会で洗礼を受けている）、同年8月単身渡米した。その頃日本では「海外苦学」を標榜した渡米機運が高まっており、八郎もその影響を少なからず受けたと考えられる。一方、多くのアジア人流入でカリフォルニアでは排斥運動が起こり始める時期でもあった。

渡米後しばらくはカリフォルニア州オークランドの伯母夫婦（大久保眞次郎、音羽子）とその娘（久布白落實）のところに住まわせてもらったが、

その後「スクールボーイ」としてアメリカ人家庭に住み込みで働いて合間に学校に通うこともしていたようである。更にその後はカリフォルニア州リビングストンで奥江清之助が開拓事業を始めていた農場に移り労働に勤しんだ。この時期はとても貧しくつらい時期だったようだ。「人間は教育が必要だ、学問を身につけねばならないと自覚」（武田清子『湯浅八郎と二十世紀』教文館、2005年、37頁）した湯浅は1915年にカンザス農科大学へ入学した。この時に、昆虫学研究への興味を覚えた。

大学を卒業した後、今度はイリノイ大学大学院へと進学して、そこで修士号と博士号を取得している。順調に研究に没頭していたように見受けられるが、しかしこの頃湯浅は信仰から離れていた。イリノイ大学には、「私は3代目クリスチャンとして日本からアメリカに来た。私のアメリカ体験は、大学での課程を終える頃であり自らのキリスト教信仰を失っていた時期であった。私はイリノイ大学に科学博士の学位を受けるための研究をする目的で来た。ここでのYMCA活動を通じて、私はキリストを再発見した。私は、YMCAに対して永遠の負い目を負うこととなった。」（1939年3月18日、University Archives, University of Illinois 所蔵）という記録が残っている。

また、イリノイ大学YMCA主事（Secretary）を務めていたC・D・ヘイズ（Hayes）によれば、最初に会った時の湯浅は「とても不幸せそうな表情をしていた」という。ヘイズや同大学在籍の日本人キリスト者がYMCA諸集会へ誘うようになり、そこで国境を超えた国際交流と信仰の回復を経験する。更に、あるクリスチャン家庭へ招かれたところ、アメリカの家庭がキリスト教信仰を土台に築かれていることに気づいた。こうした「交わり」における温かさの再発見をした。イリノイ大学所蔵史料には、以下のような文書が残っている。

私はあなたの家を訪問するのに値しないので断ろうと考えていましたが、あなたやあなたのご家族ともっとお知り合いになった方がいいと考えるようになりました。なぜなら、あなたのご家庭のようなアメリカ人の生活と直接触れる最も良い機会であると思ったからです。私はこ

の国で11年間住み勉学を積んできましたが、よくよく熟慮してみても、アメリカが今日世界のリーダーとして最も輝いているのは、その文化文明がキリスト教原理に基づいて作り出されていること、そして啓蒙されたクリスチャン家庭にそのことがはっきり示されているという結論に達しました。（湯浅からオーガスチン夫人への手紙）

こうして信仰を回復していった湯浅は、アイオワ州デモインで行われた学生集会への参加（1919年12月30日～1920年1月2日）した際、キリスト教国際主義に深く感銘を覚えることとなった。湯浅はヘイズに以下のような報告をしている。

国際主義とキリスト教。キリストの言われるとおり神を私たちの父として受け入れ、世界の人々が我々の兄弟だと信じるなら、国際的で人種を越えたキリスト教の考えはひどく理解しやすい。それは、異なる人々の隔てを克服する本当の基盤となります。例えば日本人と中国人とか、朝鮮人と日本人などが当てはまります。私たちは兄弟であり、兄弟関係の番人です。今日我々が有する不正や邪悪なことは、我々にとって共通した敵です。結局のところ、私たちは正義と博愛のために同じ戦いを戦っている同士なのです。これが、既に自由な考えを有している人々を、東洋において自由な動きを活発にするために送り出す手段や方法を模索している理由です。（ヘイズへの報告書）

湯浅自身は当初日本に変えるつもりはなかった。しかし、京都帝国大学農学部開設に伴い招聘され、デモイン集会で出会った清子夫人にも後押しされた湯浅は、独仏に文部省在外研究員として留学（1922年）後、帰国して教授に就任した（1924年）。この時、滝川事件（1933年）に農学部理事として直面し、法学部以外で唯一滝川幸辰への処分に反対している。

1935年には、前任者大工原銀太郎（湯浅の義兄）の急逝を受けて同志社第10代総長就任も、一連の「同志社事件」が起き、任期半ばで引責辞任となった（1937年）。

同志社総長辞任後、インド・マドラス（現チェンナイ）近郊のタンバラムで開かれた世界宣教会

議への出席を依頼され、賀川豊彦、河井道ら20数名と共に日本のキリスト教界代表として1938年インドへ渡った。更に、その会議報告を依頼され、日本代表としてアメリカへ向かう（1939年1月）。信仰の回復以来の渡米だった。ところが、アメリカ滞在中に真珠湾攻撃により日米開戦し、敵国人となってしまう。しかし、シーベリーら教会関係者の助力で捕虜にならずに済み、「もはや私が科学研究の分野に戻ることは難しく、キリスト教国際主義（Christian internationalism）の分野でなら、より自分自身を役立たせる機会がありそうです。」（イリノイ大学YMCA 主事ヘンリー・ウィルソン宛湯浅書簡より、1939年5月9日付、University Archives, University of Illinois所蔵）との自覚を強くすることとなった。

1946年に帰国した湯浅は翌年に同志社総長復帰（1950年まで）し新島学園理事長も務め（1947年～1981年）、その後は国際基督教大学初代学長（1950年～1962年）、キリスト教学校教育同盟理事長（1955年～1961年）と一貫してキリスト教学校の要職を歴任した。教育同盟理事長在任中、以下のような主張を述べている。

本年はわが国教育界にとって重要にして深刻な問題が提起せられたことであつた。曰く勤務評定、曰く道徳教育、曰く短大改廢（中略）この様な現実直面して、同盟は果たして如何なる態度をとるべきか、また如何なる具体的対策を提唱すべきであろうか。（湯浅八郎「一九五八年の回顧」『キリスト教学校教育』第19号、キリスト教学校教育同盟発行、1959年1月1日付）

湯浅は戦前経験した苦い経験から、キリスト教学校が戦後文部省からの指示に盲目的に従うのではなく、キリスト教学校が独自の具体策を検討すべきであると主張しているのである。

20世紀初頭には全米各地の大学を中心に日本人学生会が組織され、その全国ネットワーク化が雑誌 *Japanese Students* の発行によって促進された（1916年）。この一連の動きはYMCAの目指す世界的エキュメニカル運動と呼応するものであった。この動きの中で、学生たちは排日運動や、世界大戦を克服すべく人種を超えた国際的連帯を目

指すようになる。

こうした世界的潮流のただ中に、その潮流の中心地とも言えるアメリカで、湯浅八郎は留学時だけでなく、戦中の滞在も含めて二度過ごしていた。この経験が、湯浅のキリスト教国際主義という思想の形成に大きな影響を与えた。そういう意味では、YMCA 総主事 J.R. モットらが全米だけでなく世界を視野に入れて活動していた国際交流と教会合同運動の成果として、国際人湯浅が誕生していったと言える。

イリノイ大学留学時で経験したキリスト教国際主義の活動に、再渡米時の日米開戦中にも触れたことで、キリスト教を土台とした国際主義の思想に基づいて戦後も教育活動を展開した。その結果が国際基督教大学初代学長での活動であり、戦前の経験への反省が基督教学校教育同盟理事長時代にも生かされていた。

米国福音教会女性宣教師 G.E. キュックリヒのキリスト教幼児教育 — フレーベル思想と幼児教育のかかわりの中で —

菅原 陽子

1. はじめに

日本のキリスト教保育は創始137年を迎えるが、プロテスタントの幼児教育はこれまでアメリカの女性宣教師たちが伝道のために行った幼児教育、保育として伝えられたものが主流となり今日に至っている。女性宣教師たちの幼児教育、保育の思想や実践には世界最初の幼稚園創始者であるドイツ人、フリードリッヒ・フレーベル（1782-1852）の教育思想や進歩主義教育の影響を受けたものが多い。その為、日本のキリスト教幼児教育、保育もその思想と保育方法を継承したものがほとんどであった。

この発表で注目するゲルトルート・エリザベート・キュックリヒ（1897-1976）は、1922年に北米の福音教会から日本に派遣されたドイツ人女性宣教師である。彼女はドイツの幼稚園教諭養成学校でフレーベル教育を学び、日本において東洋英和女学校幼稚園師範科や草苑高等保育学校、和泉

短期大学などの保育者養成に携わった。また保育施設や孤児院「愛泉寮」の創設、日本キリスト教保育連盟設立時の支援など日本の幼児教育、および福祉において様々な功績を残した。戦時中も含め、54年間日本に滞在し、彼女が携わった事業の多くは、今日なお継続している。

今回の発表は、戦前期までのキュックリヒのキリスト教幼児教育の実践について示し、その背景にあるキュックリヒのフレーベル思想について、日本のキリスト教保育の主流となったアメリカ人宣教師たちの教育思想と比較し、考察したものである。

2. 生い立ち

キュックリヒは1897年にシュトゥットガルトのドイツ福音教会牧師の娘として生まれた。兄2人、姉1人の4人兄弟の末子として育つ。母親はキュックリヒが8歳の時に病死し、翌年に父親は再婚する（その後、異母弟、妹が生まれる）。1908年、父の赴任先のベルリンでキュックリヒはリゼ（Lyzeum）に進学する。1914年からの第1次世界大戦では婚約者が戦死している。

父の勧めでシュトゥットガルトの福音教会フレーベル・セミナーで学び、1921年幼稚園教諭養成上級教師の国家資格を取得する。卒業後、米国福音教会本部から父親にキュックリヒ派遣の要請があり、1922年、キュックリヒはオハイオ州に船で渡り、英語を習得し、宣教師の訓練を受け、その年の10月、24歳の時に来日する。

3. キュックリヒの教育・福祉実践

キュックリヒは来日の1922年に、（現在の墨田区）向島教会に配属されており、日本人と共に教会生活をしながら託児所と鐘ヶ淵幼稚園の運営にも携わっていた。この施設は、福音教会初代女性宣教師バーンファインドが鐘ヶ淵紡績会社の女工の職場伝道に力を入れ、後に教会、幼稚園、託児所の設立へと発展したものである。託児所は鐘ヶ淵紡績会社が日本の職場保育所としては先駆的に1902年には開設をしていたが、1925年に保育者として専門教育を受けたキュックリヒが託児所を本格的な保育施設「鐘ヶ淵子供の家」として立て直し、保育施設と幼稚園が一体的に運営されるようにした。

一方で、バーンファインドは、小石川で孤児収容施設『愛泉寮』の運営も始めていたが、その愛泉寮内には福音教会の事業の一環として1923年から1933年の間、保母養成所が設置されていた。来日間もないキュックリヒが指導者として、この福音教会保母養成所の運営を担い、自らが授業も行った。この保母養成所はその後目白に移って東京保育女学院となり、1938年からは東洋英和女学校幼稚園師範科と合併した。

米国福音教会の女性宣教師派遣は1900年のバーンファインドの来日より始まっていたが、彼女たちが活動した小石川地区の孤児の救済、向島の女工たちの生活や育児の援助の必要性は高まっていた。キュックリヒは1922年に来日し、福音教会の宣教活動、福祉活動、教育活動を引き継ぎ、幼児教育者としての専門性を活かした展開をした。具体的には、(1)向島教会の伝道活動、(2)「鐘ヶ淵子供の家」の工夫された環境整備と運営方法の案出、(3)保母養成施設「東京保育女学院」の創設とその指導的役割である。

4. アメリカ女性宣教師の幼児教育思想

キュックリヒは、来日して20年余りの間に幼児教育・福祉活動・保母養成教育において精力的に活動をしていたが、その思想的背景についてはこれまで明らかにされていない。キュックリヒの思想の中心となったキリスト教とフレーベルの教育について、アメリカの女性宣教師達から日本に伝わった流れと比較しながら検討したい。

日本にフレーベル思想と幼児教育がもたらされる以前の1870年代から1900年代初めのアメリカ女性宣教師たちの思想的背景としては、次のものが挙げられる。ひとつはフレーベルの思想への積極的評価に基づく接近であり、もうひとつは進歩主義教育への傾斜である。

フレーベルが『人間の教育』で著した教育とは、人間が意識と認識とをもって自由に生活し、自らの本質を外に十分に表現できるように導くことである。そのために教育はまず人間を、神と自然と一致するように導くことにあった。また、フレーベルは、子どもは遊戯によって自己活動を展開すると考え、その実現のための教育玩具として恩物を作り、子どもが恩物で遊ぶことを通して子ども

の中に宿る神性をゆがめることなく発現させようと考えていた。

人間を罪ある存在と考え、子どもの回心や悔改めを求めるアメリカの伝統的なピューリタン理解とは異なり、人間の内に存在し、人間を生かし支配する統一者なる神を知ることをもって教育の目的とするフレーベルの思想への接近は、アメリカ女性宣教師たちにとって極めて自然なものであった。また、ジョン・デューイ（1859-1952）等による強力な教育改革運動として展開された進歩主義教育は、その根底に人間に対する理想主義的理解をもち、方法論的には進化論的科学理解に基づき人間の成長発達を求め、社会の進歩発展を求める側面をもつものであった。それは彼女たちの多くの信仰理解と矛盾することなく受け入れられた。

このようなアメリカ女性宣教師たちのフレーベル教育と進歩主義教育の思想は、日本の基督教幼児教育にも受容されていったが、その初期にはフレーベルの教育哲学や思想には至らず、恩物を規則正しく使うことに重点を置く園がほとんどであった。また、進歩主義教育の導入・展開においては「自由保育」という先駆的保育形態が基督教保育の実践として位置付けていった。

5. キュックリヒのフレーベル理解

ドイツでフレーベル教育を学び、アメリカ人宣教師たちによる幼児教育の始まりから約40年経つ日本で、キュックリヒはどのようにフレーベルを伝えたのだろうか。

キュックリヒのフレーベル思想に関する言説は以下の論考に著されている。

- (1)『学齢前に於ける宗教教育』1-5「日本日曜学校協会編纂 基督教宗教々育講座」基督教出版社、1932-33年。
- (2)『フレーベル先生を憶ふ』「基督教保育」21号、基督教保育連盟、1938年。
- (3)『保育の使命を全ふせよ』「基督教保育」26号、基督教保育連盟、1938年
- (4)『子供に神との関係を教えよ フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」解説の一説』「子供の教養」子供の教養社、1939年。
- (5)『フレーベル精神について』「ホームキンダー」フレーベル館（年代不詳）

- (6)『お母さまに』「愛のうちに育てられ」基督教保育連盟関東部会、1966年。

これらの論考から考察すると、キュックリヒは、人間は神につくられた作品であり、神に創られた人間のとりわけ乳児、幼児期が大切であるという子ども観を持つ。そして、子どものもつ神性を自覚させること、その時期に即する教育を行うことを教育観とする。それらは、ドイツの人間観から来ていると述べており、フレーベルの人間観、教育観と一致している。

また、キュックリヒは、フレーベルが子どもたちのために全く新しい世界を造ったように、日本の子ども達のために、基督教教育として、幼児教育として、また、母親教育として今日の子どもの世界を造るというフレーベルの精神を持つことが大切であると考えていた。

6. むすびに

キュックリヒは、日本派遣初期のアメリカ女性宣教師たちからおおよそ40年後の来日であった。その為、当時、主流となっていたアメリカ女性宣教師たちの基督教幼児教育思想と教育の実践を受け止めつつ、自身がドイツで学んだ基督教思想、フレーベル教育思想に基づき、鐘ヶ淵幼稚園、鐘ヶ淵子供の家の保育や、母親教育、また、東京保育女学院の保育者養成を展開していった。

それは日本派遣初期のアメリカ女性宣教師たちのフレーベル主義教育から展開された保守派による恩物重視の教育ではなく、進歩派の新心理学や児童研究の影響を受けた実践である進歩主義教育でもない。キュックリヒにおいてフレーベルの教育とはドイツの基督教人間観、子ども観による教育精神であり、子どもを取り巻く社会の改革を行うために保育者にとって重要な教育の根本精神であった。

主な参考文献

- ・Jetter, Reinhild Bettina (2002) : *Gertrud Kücklich. Japan-Missionarin der Evangelischen Gemeinschaft. Ein Beitrag zur interkulturellen Bedeutung christlicher Missionsarbeit anhand ihrer Berichte von 1922 bis 1975.* Stuttgart: Medienwerk der Evangelisch-methodistischen Kirche, p.74.

- ・記録編集委員会『日本福音教会史』小石川白山教会、1997年、29-36頁。
- ・小石川白山教会百年史編集委員会『小石川白山教会百年史』小石川白山教会、2008年、18-23頁。
- ・奥田和弘『アメリカにおける幼児教育』キリスト教保育連盟百年史編纂委員会「日本キリスト教保育百年史」序章、第1節、キリスト教保育連盟、1986年、6頁。
- ・上笹一郎、山崎朋子「はたらく母性に保育所を鐘ヶ淵紡績東京工場託児所と鐘ヶ淵子供の家」『日本の幼稚園—幼児教育の歴史』理論社、1976年、130-136頁。
- ・宍戸建夫「鐘ヶ淵「子供の家」とキュックリヒ」『園児のお母さん』ひかりのくに、1978年、47-48頁。
- ・荒井武 訳『人間の教育』岩波書店、1964年、11頁。
- ・荘司雅子『フレーベルの生涯と思想』玉川大学出版部、1975年、81頁

発表を終えて

昨年3月にこの研究会に入会しました。これまで幼稚園教諭として勤めながらの研究でしたが、この4月より保育者養成校勤務と博士後期課程での研究となりました。研究会での発表では、多くのご質問、ご助言をいただき感謝いたします。日本のプロテスタント幼児教育思想史研究は認知度の低い研究領域ですが、宣教師の残した史料から学ぶことは多く、キリスト教保育の理論の再構築に欠かせない研究であると考えています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

『横浜海岸教会150年史』の編纂に関わって(2)

岡部 一興

第Ⅲ篇 日本基督教会時代(1890年—1941年)

日本基督教会創立と信仰告白

明治10年代のキリスト教は、都市に農村に新しい地盤を求めて躍進し、政治、教育、文化、思想界に大胆な発言がみられ、社会への働きかけがみ

られた。しかし、明治20年代になると1889(明治23)年には大日本帝国憲法、翌年教育勅語を發布し天皇制に基づく国家体制が出来上がると、キリスト教は国家とは相いれないものとして圧迫されていった。その圧迫は、基本的には1945年の太平洋戦争まで続いた。

1890(明治23)年12月、日本基督一致教会では第6回大会を12日間にわたって数寄屋橋教会において開催した。大会の主な内容は、憲法・規則の審議で、信仰告白を制定し憲法・規則を改正し、名称を日本基督一致教会から日本基督教会に変更した。この信仰告白は、「英国プレスビテリアン教会の二十四箇条」を使用するという提案であった。山本秀煌『日本基督教会史』には、当時の状況を次のように伝えている。

温和派と言われた海岸教会の稲垣信から信仰告白の提案があった。山本秀煌は、稲垣信の発議は自主的なもので、彼が牧する教会ではプリマス・プレズレンの影響を受け神学生2名と長老1名が、この派に離脱した。この派は、聖書を熟読し熱心な信仰と祈祷の精神に敬意を払い、教会の制度や信条はなるべく簡単にすべきであるという神学を有していた。これに対し深樫之助、植村正久等は憲法編成調査委員であったので提案する資格はなかったが、この稲垣の意見に同調した。こうして、信仰告白は簡潔で単純であるべきで、牧師や神学者、長老のためのみではなく、一般信徒向きでなければならないとしたのである。インブリーは、この状況を知って調査委員と相談し、新たな信仰告白の作成をした。ここに「日本基督教会の信仰告白」が制定され、礼拝で唱えることができる短い告白となった。

日本の花嫁事件

田村は、1893(明治26)年に米国の出版社から“The Japanese Bride”を出版した。これより以前、6年前に『米国の婦人』という題で同じ本を日本語で出版していた。その時は問題は起こらなかったが、1893年に英語版で出版した時に日本古来の倫理道徳に反するもので、この書が日本の恥を海外にさらすものだと批判された。とりわけ一般新聞の『日本』、『万朝報』が攻撃し、キリスト教会

の新聞や雑誌である『福音新報』、『基督教新聞』、『女学雑誌』も批判を繰り広げた。

この問題が東京第一中会で協議されることになった。元海岸教会の会員であった井深梶之助、熊野雄七、山本秀煌が告訴人となった。この書は「虚実ヲ混淆シ妄リニ日本人ノ恥辱トナルベキコトヲ記載シタリ、是即シ同胞ヲ譏誣シタルモノニシテ、日本基督教会ノ色ヲ汚シタルモノトス」と記している。（『井深梶之助とその時代』第2巻346-347頁）。田村はそれを不服として大会に上告したのであった。1894（明治27）年7月の第9大会においては、田村の免職に対し宣教師のJ. H. バラ、フルベッキ、ワデル等が動議を出して反対した。しかし、押川方義が動議を出し、田村の書は教師にあるまじき「軽佻浮薄ナル著述」で、同胞を侮辱しその名誉を毀損し、「日本基督教会ノ面目ヲ汚シ、伝道上大ナル妨害ヲ与へ」反省もなく悔い改めもないもので、これは教師の職に適さないので免職という案が提出されて可決された。最後に植村正久も糾弾した。

ここに、田村は自ら日本基督教会を脱会した。田村が牧する教会（現在の巣鴨教会）は、田村が説教することを認め生涯守り続けた。1925年1月8日植村の死去後、翌年の10月4日日本基督教会東京中会において田村の復帰を決めた。この事件は何を意味していたかを考えると、大日本帝国憲法が公布されてからキリスト教への圧迫が強まり、教勢が停滞し日本のキリスト教が社会から孤立していく中で、裁判において言われていた「伝道上大ナル妨害」という問題があった。一般新聞、キリスト教系新聞などが批判するなかで、国家主義的な確立過程において、個人が出版した書をめぐって争うことは、ある面では教会裁判になじまないことでもあった。しかも、1887年に『米国の婦人』の題で出版した時には何の反対もなかったのに、6年後に英文で出したときに問題視したことに田村が納得できないところがあったのではないだろうか。

細川瀏牧師の就職と牧会

1893年3月稲垣信が辞任、96年3月細川瀏が就任。しかし、1898年5月には辞任するに至った。2年余りの短い期間であった。辞任後は日本基督

教会伝道局から台湾伝道に派遣された。細川は、29歳の若さで就任、若さゆえに色々の試みを提案したのはよいが、それが海岸教会の実態に適合しているかを十分に検討しないで提案したところに教会を混乱させてしまったところがあった。なぜ、短期間で辞任したかを問うと、98年5月15日の臨時総会において、「小生儀さきごろ諸君の招聘を忝くして教会の任に当たり居り候処短才不能にして職責を尽くすことを得ず候に付きやむ得ず辞任仕り度・・・」と述べた。議場では、辞表を受け入れるを可とするが82票、否とする者が24票であった。彼は、「礼拝を午後にしたい」、「牧師伝道学校教授兼任」、「海岸教会常置員会設置」などの事項を就任早々提案した。こうした提案が長老たちに支持されなかったところに辞任せざるを得ない原因があった。

再び稲垣信牧師の登場

20世紀大挙伝道の展開

1898年6月稲垣信を再び牧師に招聘することを可決した。1899（明治32）年文部省訓令12号が公布された。この訓令は学科課程にキリスト教を置くと、徴兵猶予がなくなり、また上級学校への進級ができなくなるというものであった。男子校の明治学院、青山学院、同志社、立教学校、東洋英和学校、名古屋英和学校の6学校が連帯して共同声明を出し、上記2項目の撤廃を勝ち取っていった。しかし、キリスト教女学校は、キリスト教の教科を置き、礼拝することを優先させたため、全国のキリスト教女学校は各種学校に甘んじた。

そうした社会状況のなかで、1900年4月25日第10回日本福音同盟会大会において20世紀大挙伝道が決議された。同年10月、第3回宣教師大会を開催した。翌年から始まる20世紀大挙伝道を側面から支援することになった。明治20年代は大日本帝国憲法が公布、同時に教育勅語が公布されるなかで、キリスト教の教勢が停滞、30年代になっても上昇することはなかった。そうした不振の中で、「我が国をキリストに捧げよ」のスローガンを掲げた。10名の委員を選び、全国を11区に分け、如何なる運動を展開するか、運動資金の募集などを決めてスタートした。

稲垣は、1901年2月関西に向けて出発、井深梶

之助、星野又吉と神戸で特別伝道を行ない、大阪では吉岡弘毅宅や大阪YMCA、大阪の東西両教会、南、北の教会において説教にあたった。それ以後は大谷虞（やすし）と中国地方で伝道した。大挙伝道は1901年で終わりかと思ったが、1902年4月に開かれた福音同盟会大会において、継続案を議決し、同年5月10日より6月30日にかけて大挙伝道が展開された。これを受けて海岸教会でも同年6月に大挙伝道演説会を展開した。大挙伝道の特徴を記すと、第一には計画的、組織的に伝道が展開された。第二には都市を中心に展開され、伝道困難な農村や小都市には力を入れなかった。第三には都市を中心に公務員、教師、サラリーマンなどのホワイトカラー層や学生を伝道の対象とした。

笹倉彌吉の就任

日本宣教50年と海岸教会

1909年4月日本宣教開始50年祝賀会が神田美土代町の青年会館で開かれた。この時点でのプロテスタント教会の信者は7万5000人、そのうち日本基督教会の信徒総数は1万9838人、教職者124人、独立教会の数は63、半独立教会147、講義所187であった。東京中会による1910年の海岸教会の教勢をみると、会員数男282、女583、児童43、受洗者108名、113名の富士見町教会の次に多かった。1909年3月10日は、海岸教会創立34周年記念の日で、J.H.バラが祝辞を述べた。開教50年祝会当時の初代宣教師には、バラとタムソンがいた。バラは渡来48年、タムソンは46年であった。1910年10月、横浜ユニオン教会は山手居留地49番に新会堂を建設、外国人信者の3000ドルの寄付を基礎に建てられた。今まで海岸教会の会堂をユニオン教会と共有していたが、ユニオン教会が山手に移ったので、海岸教会が会堂を占有することになった。日本宣教50年の記念すべき年の10月26日に伊藤博文がハルピン駅頭で朝鮮人愛国者安重根（アンジュンゲン）によって暗殺された。明治30年代になると、産業の発達にともない労働改善を求めて労働組合期成会が結成され、社会運動の機運が高まった。1900年には治安警察法を制定、社会運動の規制に乗り出した。1901年5月には安部磯雄、片山潜、幸徳秋水らが社会主義政党である「社会

民主党」を結成したが、活動を展開することができなくなった。また1904年夏海岸教会では、荒畑寒村が郵便局勤務の鈴木秀男と洋服縫職の親方である服部浜次らと海岸教会の牧師館で「横浜平民社」を立ち上げた。

全国協同伝道と海岸教会

1914年3月から1917年5月にかけて、「全国協同伝道」が全国のプロテスタント教会の諸教派を動員して行なわれた。1910年世界宣教会議がエディンバラで開催、キリスト教会が協同してエキュメニカルな運動を展開することを決めた。1913年4月議長のJ.R.モットが来日、「基督教の事業を拡張」するため宣教師、牧師の代表者及び教役者と協議、日本各地を視察した。また、全国協同伝道は日本基督教会同盟の全面的協力のもとに展開された。横浜では、1914年11月1日から11日にかけて、児童大会、信徒大会、大演説会、職工会、学生及び実業大会、婦人大会及び青年大会教育家大会、役員有志懇談会などが次々に打ち出された。

海岸教会では市内の教会と協力しつつ伝道を展開すると同時に、1915年3月教会創立43年を祝うための記念伝道を展開した。同年6月には市内日本基督教会特別伝道集会を海岸教会で開き笹倉が説教、8月には金目伝道（平塚）を展開。同年11月の「教会日誌」には協同伝道の立て看板を手分けして市内の要所に立てかけて宣伝、また「協同伝道案内書」を作成したりしている。全国協力伝道は1年延長され、1918年の『福音新報』の記事には海岸教会では「公園伝道」と言って、横浜公園で同年4月から10月まで午後1時から5時まで同公園で時間を決めて説教をする特異な伝道を行なった。1915年には大正天皇の即位を祝い「御大典伝道」を展開した。1915年の受洗者は145名を記録（指路教会の受洗者151名）。聖公会を除いたプロテスタント教会の教勢を見ると、1913年が5万5600人だったものが、1917には7万6288人、1921年では9万3678人へと上昇した。

会堂取得と会堂大修理

教会創立50年を祝し、1921年3月19日米国リフォームド教会から教会建築物を無条件で譲渡するという恵に与った。1921年3月、創立50周年を

記念して教会堂の大修理を行なった。アメリカ改革派教会からの寄附2,558円、教会員の献金4,000円によって大修理が可能となった。また教会創立50年にあたり、海岸教会の出身教職は30名に上った。

小川義綏、押川方義、本多庸一、北原義道、奥野昌綱、手塚 新、井深梶之助、眞木重遠、植村正久、伊藤藤吉、藤生金六、和田 肇、山本秀煌、星野光多、坂野嘉一、稲垣 信、林 竹太郎、原澤紀堂、村井知至、加藤萬吉、星野又吉、石田善吉、多田 晋、澤地政和 北野高彌、秋元茂雄、白石保太郎、大久保直一郎、久山峯四郎、梅森豪勇

関東大震災と教会の復興

1921年12月に教会堂の大修理を終えたばかりのところに関東大震災がめぐって来て、1923年9月1日の大震災で教会堂が倒壊した。大震災の被害は、教会堂の倒壊だけではなく、多くの教会員が犠牲になった。「一九二三・一二・九震災永逝者追悼礼拝順序」によると、大震災の犠牲者は28名に上った。当面の問題は礼拝の場所の確保であった。共立女子神学校の講堂、常磐町のYMCA会館を借りて礼拝を守り、1924年8月には仮会堂建築案を可決、同年11月26日に落成式を行なった。1931年7月第5回新会堂築建築資金募集委員会の決定では、5万円の目標を掲げた。そして、大震災後10年間の試練と苦難を経て、1933(昭和8)年3月12日に献堂式を迎えた。目標額の5万円が集まらなかったため、教会堂の長さを1スパン(約5m)短くする方法がとられた。

大震災から新会堂が建てられる間にいくつかの注目すべき事項があるので上げておきたい。一つは海岸教会では1925年の長老選挙において3人の女性長老が初めて選ばれた。1907年10月日本基督教会大会では、憲法第8条の改正があって女性長老への道が開かれた。しかし、東京中会では女性長老を選出することを否決したのであった。第二に特徴的に表れたことは、関東大震災直後に被災者救援のため、横浜の女性団体の有志が「横浜婦人会」を結成、それが横浜連合婦人会として発展、紅葉坂に横浜連合婦人会館を建設した。罹災者の救援から始まって、料理講習会、家庭衛生講演会、

結核予防の講演会等様々な運動を展開した。それらの担い手には、クリスチャンが多く、海岸教会の婦人会もこの運動に加わった。

(『横浜海岸教会150年史』2022年7月15日出版)。

参考文献は、次号に記す。(続く)

川島第二郎氏を偲ぶ

花島 光男

川島第二郎氏が2021年8月19日に亡くなっておられたとの連絡があった。すでに2年以上経過している。川島氏は慶応義塾大学卒業、都立高校の教員を務めた。94歳であった。

1979年に横浜市市民クラブ『ヘボン特集号』に執筆参加し、横浜プロテスタント史研究会創設時の原会員であり、草創期の例会ではレギュラーメンバーであった。当時から川島氏の研究は、バプテスト宣教師ゴープルであった。本人の研究歴については、川島氏の著書『ジョナサン・ゴープル研究』に詳しく記されている。

それによると、東京より横浜に転居した際、奥様の意向とは異なりバプテストの横浜教会に転会。そしてその教会に関わるゴープルの研究に取り組むことになった。

バプテスト史研究では、関東学院に大島良雄氏、故小林功芳氏、小玉敏子氏などがおられるが、ゴープルについては川島氏の独壇場であった。

都立高校に勤務し、研究と発表の環境には恵まれず、また奥様の御病気の看護等もあり調査、研究には大変苦勞された。少し高く滑らかな声で語られ、研究調査では緻密かつ几帳面で厳格な性格は、時には厳しく他の研究を批判することもあった。

バプテスト宣教師ジョナサン・ゴープルはヘボン、SRブラウンと共に横浜最初期の宣教師であったが、その経歴などは当時の他の宣教師とは異なり、その評価は非難、嘲笑を含んだものであったという。川島氏はゴープルに関する資料を集め、調査研究しその功績を紹介、その正当な評価を世に問うた。

ゴープルに関する研究は新教出版社より「ジョ

ナサン・ゴープル研究」として出版された。

さらに研究はバプテス宣教師ネイサン・ブラウンに進み、ギリシア語の学習により、ブラウンの「志無也久世無志與」（しんやくぜんしよ）の現代仮名字体版を監修発行した。これは新約聖書全文をひらがなで表記したもので、実際には普及しなかったが、庶民への宣教を目指すバプテストの思想の表れであり、この翻訳出版は驚異の大事業であった。そして現代において、これを川島氏が新教出版社より出版したことも驚異的なことであった。

研究活動をしつつ病身にある夫人を看護し、看取った姿は、宣教活動の中で夫人エリザを失ったゴープルと重なって見えるのは、私だけではあるまい。エリザの墓は、横浜外国人墓地にある。

川島氏の妹さんの新井田良子さんが『白虎隊長日向内記の斗南救援工作』を著している。

日向は隊長であったが自決者の中にいなかったが故に様々な憶測が生まれた。

関東学院の創立者坂田祐は日向内記の孫にあたる。坂田は祖父の名誉のためにこの疑問に苦慮しつつ対応していた。新井田良子さんはこの本を小説としているが、詳細な調査研究に基づいて書かれ、まさにこの問題に一つの可能性を提供している。バプテスト史の研究者であった川島氏は関東学院とは直接関係を持たなかったが、妹の新井田さんにより、関東学院との強い関係が感じられるのである。



横浜プロテスタント史研究会、会員の新刊著書

吉馴明子 『石は叫ぶー靖国反対から始まった平和運動50』 刀水書房。キリスト者遺族の会編製
88頁 定価：本体2,500円＋税 8掛けで案内

岡部一興著 『へボン伝』 有隣堂新書、2023年9月7日出版 定価1,200円＋税 1,320円 著者割引で1,100円でございます。

小檜山ルイ著 『明治の「新しい女」佐々城豊寿と娘・信子』 勁草書房 2023年9月20日発行、5,000円＋税 (378頁)

図書については、事務局にお問い合わせください。

【編集後記】

この会報では、毎月の例会における発表について、発表者に発表の報告としての文章をお願いしております。発表者は当日レジュメを用意、これは原則として事前に配信しておきますので、ZOOM参加の方にも届いていますが、この会報ではそれを短く要約するとともに、発表での質問等への応答、発表後の感想等も含めて報告をお願いしています。これは研究会の大切な記録でもあります。

コロナはほぼ終息したように思われ、社会の活動が少しずつ戻ってきた。しかしながら、ウクライナの戦争はいつ終わるともわからない。更にイスラエルとパレスチナ・ガザとの戦いが始まり、ガザ一般市民の莫大な犠牲者数には、驚くばかり。特に子供が多数犠牲になっている。また、地球環境の変化は、年ごとに大きな混乱が報告され、これは止まることなく拡大してゆくのもかもしれない。21世紀になった今、世界は不安と混乱が拡大してゆくように見える。(花島)

横浜プロテスタント史研究会

例会 原則として、毎月第3土曜日
午後2時

会場 日本キリスト教団横浜指路教会
横浜市営地下鉄ブルーライン関内駅
JR 関内駅

ZOOM配信もあります。事務局に連絡ください。
会費 2,000円／年